

# 貝坂倶楽部

—季刊 2015 秋号 通巻第 33 号—



樋口一葉にゆかりのある平河町一丁目。  
江戸名所図会には「この地は昔から甲州  
街道にしてその路傍にありし一里塚を土人、  
甲斐塚とよびならわせしとなり」とある。貝  
塚であったのが現在定説となっている。



発行 NPO つくしくらぶ

## 目次

寄稿者一行紹介

3つの飛行ルート	藤原 英郎	3
茶道VS紅茶道？	田村 徹	5
大相撲	関 敦	8
あなた 何ができますか	高松 良晴	10
震災レポート：復興の現状と課題	渡辺 陽一	13
Tea Time: 9.11のデルタ航空15便		20
少女	野田 とし子	24
ハーモニカ	高松 泰代	30
弁当と作業服	渡辺 成典	35
スカーフ	藤原 昌子	37
終戦70周年：私の空襲体験/終戦70年に想う歌	高橋 育郎	43

## 寄稿者一行紹介

藤原 英郎	銀行員、現役時代に英国、スイスに勤務
田村 徹	研究員→国連環境計画局→大学教授→環境コンサルタント
関 敦	非鉄金属メーカー機械技術者
高松 良晴	国鉄マン、鉄道建設改良工事に従事
渡辺 陽一	北東公庫（現日本政策投資銀行）元理事
野田 とし子	漆工芸
高松 泰代	NPO つくしくらぶ 理事長
渡辺 成典	民生委員
藤原 昌子	NPOつくしくらぶ 副理事長
高橋 育郎	国鉄マン、日本童謡協会会員、日本橋「心のふるさとを歌う会」代表

－出てみてわかった世界－

### 3つの飛行ルート

藤原 英郎

仕事で欧州へ出張することは多かった。欧州への飛行ルートは飛行機の航続距離が長くなり、また新しいルートが開放されたりして、次第に便利になった。時代とともに3つあって、それをすべて経験したのだが、飛行ルートに時代変化を感じたことである。

当初、東京から欧州各国に行くには、北回りと南回りの2つの方法があった。通常は、早く行ける北回りが利用された。1970年に、ドイツ・トレニーとして、欧州に初めて行ったときは、アラスカのアンカレッジ経由の北回りだった。1972年にフィンランドのヘルシンキに行ったときも、アンカレッジ経由だった。当時、フィンランドの航空会社であるフィンエアーは、東京に乗り入れていたが、香港等の南回りの飛行しかなかった。行く先はヘルシンキである。これは相当長い時間がかかる。そこでドイツ航空の飛行機に乗り、アンカレッジを経て、フランクフルトに行き、乗り換えてヘルシンキに行くこととした。

その頃、多くの北回りの飛行機がアンカレッジに集中していた。空港には大きな出発ロビーがあり、多くの観光客で賑わっていた。最初の寄港地であり、しかも当時のアメリカは最新の品が多く並んでいた。サービスも申し分なかった。その後、飛行機は北極海にそって欧州に向かった。その頃は、まだソ連のシベリアは開放されていなかった。フランクフルトで乗り換えて、フィンエアーのヘルシンキ行きに乗ったのだが、この飛行機で初めて、トナカイのステーキを食べた。珍しくはあったが、あまり好みではなかった

さて1985年にスイスから戻ってみると、今度はシベリアが開放されていた。しかし飛行機はモスクワに寄航しなければならなかった。ここで燃料を補給して、それぞれの各航空会社は欧州各地に行くことになった。飛行機は一旦、出発ロビーに行かねばならなかったが、飛行機から直接行けるようになっておらず、乗客は歩いて行かねばならなかった。階段を降りると、そこにはソ連軍の兵士が数人並んでいて、出発ロビーまで案内していた。いずれも、銃を持っていた。

出発ロビーであるが、若干の商品を売っているが、販売員の態度がはなはだお粗末である。アンカレッジの販売員とは全然違う。売る気があるのか、ないのか全く分からない。品が沢山あったのは、ソ連特産の琥珀だけだった。トイレの臭さにも閉口した。たまたま出発ロビーのすぐ前で就航のお祝いらしいセレモニー

が行われたので、仕方なくガラス越しにそれを見ていた。それはソ連初のジャンボジェットであったそうだが、驚いたことに、ボーイングのジャンボジェットそっくり、そのままの姿であった。私がジャンボ機に乗ったのは、トレーニーの帰りにミラノ国際空港からニューヨークに飛んだ1972年の、はるかな昔であることを思い出した。

モスクワ寄航便は何回か利用した。最大の楽しみは、シベリア上空からの景色であった。当時の飛行機は、ソ連の規制があったものか、比較的低い高度で飛んでいた。晴れた日には、地表の表情がはっきりと読み取れた。川が蛇行している。この川の蛇行がいちばん印象深かった。川はいくつも現れたが、さまざまに形を変えて、しかも自然の色彩が美しい。古地図を少々収集しているが、全体を見ると、古地図そのものである。

その後、飛行機の航続距離が飛躍的に伸び、現在まで続く北極点経由の欧州行きとなった。その頃には、フィンエアーも北回りを開拓し、今では日本は欧州に一番近い国として、売り出している。東京を出発してから、ベーリング海峡に向かい、そこから一挙に北極点の中心に飛び、それから欧州各国を目指す。北極点に行くルートにも何回か乗り合わせた。ある時、客室乗務員が近くの乗客に、オーロラが見えますよと声をかけた。眠い目を開け、外を見ると色とりどりのオーロラが、乱れ飛んでいるのが見えた。何ともいえぬ気持ちだったことを覚えている。オーロラのただ中を飛んでいる。こんなにきれいな景色は見たことがない。しばらく、オーロラが消えてなくなるまで、目を離すことができなかった。



Wikipedia より

## 茶道VS紅茶道？

田村 徹

日本にはコーヒ専門店があちこちに沢山あり、アメリカ系の大型店が次々と都市部に進出しています。これに対して

紅茶専門店というのはあまり見かけない、紅茶愛飲家大国である英国を何度か訪れたことがあるが、僕の知る限り日本の様に沢山のコーヒ専門店を見かけることはなかった様に思います。しかし、知人の英国人の話では、最近、益々コーヒ好きの人が増えているそうです。

僕はコーヒの香り、たばこ葉の香りは大好きですが、どちらも体が受け付けなくて楽しむことが出来ません。

困ったことに、日本で友人宅、会社を訪れた時、殆どの場合、コーヒが出される事です。

その時の空気により、日本茶にして頂けませんでしょうかとも言っても、紅茶にして下さいとはなかなか言えません。

紅茶も緑茶も同じ茶葉から作られるので原材料は同じですが、紅茶は乾燥前に発酵させる工程が加わる点が緑茶との違いですが、日本茶には軟水、つまり日本の水が適しているが、紅茶には硬水が適しています。その為か英国で紅茶文化が発達し、アフタヌーンティーという習慣が生まれ、昼間の社交の場になった様です。

確かに、英国で飲む紅茶、それも朝に飲むミルクティーは秀逸だと思います。僕の一番好きなのは、少し贅沢ですが、ホテルに泊まった時、それも朝食前にルームサービスで運ばれてくる大型の金属製のお盆に白い陶器製のポット、ミルクサーバー、砂糖ポット、それに何より洗練された美しい紅茶カップで楽しむ本場紅茶の味は忘れることが出来ません。

英国に紅茶文化が根付いたのは16世紀の半ばで、既に500年の歴史があります。

上流階級を中心にしてアフタヌーンティーの文化が根付いたのは17世紀になってからのようですが、この楽しい「文化のお裾分け」は庶民の間にたちまち広がり、ティーハウスの文化が生まれたようです。

僕が紅茶の美味さを知ったのは、65年以上前に母が、リプトンの黄色缶から紅茶葉をまるで、貴重品を扱うようにスプーンで掬い、茶渋で黒褐色になった使い込んだストレーナで入れてくれたミルクティーでした。

勿論、その頃ティーバッグなどはなく、母の機嫌によって変わる匙加減を心配しながらも楽しんでいました。当時、リプトンと言えば黄色缶だと思い込んでいて、青色缶がそれより高級だと知ったのは何十年もたってからの事です。現在、国内でも沢山の紅茶メーカーの茶葉を購入することが出来ますが、僕

のお気に入りにはF & Mです。

ロンドンの中心街にその本店があり、中二階に喫茶室が有り、マフィン、ビスケット、サンドイッチを楽しみながら、頂くミルクティーは最高です。

ここからは店内が見渡せるので、美しく飾り付けられた店内に出入りする英国紳士、淑女を見ながら過ごすひとは最高だと思います。もう25年も前の出来事ですが、英国に滞在することが多かった時、ビジネスパートナーの英国人が、連日長時間の会議、会議の連続で中々F & Mの営業時間内に店に行けなくてイライラしている僕を見て、パートナーの秘書がそれでは、ご希望の品を私が代わりに行って買ってきますけどと言ってくれたことがありました。

この時感じたのは、確か40年ほど前にフォークランド紛争があったときのことを思い出しました。当時、英国人が神経質になっていたせいかもしれませんが、日本人に接する彼らの態度をあまり快く感じていなかったことを思い出し、日本人も対等に認められてきたのだと感じました。

日本には茶道という伝統文化があり、秀吉の大茶会が有名ですが、つい数十年前でも阪急電鉄の創始者小林一三氏、松下幸之助氏など経済界で活躍された方が、時の有名人を招いてお茶で、もてなしをされた様子が数多く写真に残されています。京都の美術館では秀吉、松下幸之助氏お気に入りの茶器が大事そうに釣り糸で耐震対策をされて展示されています。

先日、小林一三美術館を訪れた折、氏が後藤慶太氏、松下幸之助氏など経済界の重鎮、時の政治家達をもてなした茶器の数々、その時の茶室を見学しましたが、当時の光景を想像しながらタイムシフトを楽しむことが出来ました。ところが、どうしても僕は茶道の家元制度という排他的で属人的なものが理解できません。華道、歌舞伎、能楽、日本舞踊など世襲制度が敷かれ、ピラミッド構造になっていて、フラットな組織になっていません。これでは国際化が進む世界の潮流に取り残される事態も起こりうるのではないかと危惧しております。

一方、紅茶には現在のところ紅茶道というものは存在しません。紅茶カップは茶道の陶器と違う磁器で色鮮やかな柄が施され、明るくて清潔感を醸し出しています。

紅茶カップ、ミルクポット、ティーポット、ティースプーン、バラの一輪さし、ケーキ、サンドイッチ皿など茶道と同じくらい多くの道具を必要としますが、茶道の様に大がかりな茶室は必要としません

最近、若い女性の間で紅茶を楽しむことが流行し、テーブルコーディネートを学ぶことが秘かな流行になっているようですが、マニュアルなども特になく個人の感性で、茶葉の品質評価から始め磁器、花器、テーブルコーディネートするのが英国流の様です。

英国はもともと ISO 規格、つまり、文書とマニュアルで、全ての仕事や作業を標準化して、誰が何時、どこで実施しても仕事、作業の出来栄が変わらないように「担保する仕組み」を誕生させた国ですから、紅茶文化にも簡単なマニュアルくらいは存在するのかもしれませんが、個人の感性を大切にする姿勢には、ほっとします。

僕の紅茶道は全く自作自演で、楽しければ、美味しければ、自給自足の雰囲気があれば良しとして、最近では、お気に入りの J A Z Z ピアノ曲を聴きながら自宅で育てた無農薬レモンのジャムをクッキーに乗せて食しながら、紅茶を楽しんでいます。





## 大相撲

### 関 敦

昔から大相撲が大好きである。テレビ放送が始まった頃、近所の電気屋さんへ弟と一緒に、毎夕、テレビの相撲を見に行っていた。私は栃錦の上手出し投げに、弟は若乃花の上手投げに拍手喝采。その後、横綱に昇進した栃錦と若乃花の千秋楽の全勝対決、若乃花が勝ったけど、兄弟喧嘩をした記憶はない。私の最良力士はその後、同郷の大鵬、千代の富士へと移り、現在は白鵬のファン。白鵬の次はまだ決まっていないが、次もモンゴル出身力士かもしれない。

今年の初場所、春場所、五月場所に名古屋場所、四場所続けて連日「満員御礼」の垂れ幕が下がり、大相撲人気が復活しているようだ。観客席には最近「スージョ」と命名された女性ファンが大勢座っている。



ハンサム力士の「遠藤」や「勢」、モンゴルの大器、「照ノ富士」と「逸ノ城」の活躍が人気回復の理由なのだろうが、前人未到の記録に挑んでいる横綱「白鵬」の存在も大きいに違いない。ところで、大相撲には悠久の歴史がある。八世紀の日本書紀の中に展覧試合としての記載があるので1300年近い歴史である。五穀豊穰や国家安泰を祈願する神事として執り行われた相撲は、格闘

技として武士階級に好まれた。あの信長さんも相撲が大好きだったらしく、天正六年(1578年)、安土城に全国から1500人の力士を集め、強かった力士を家臣にとりたてたとのこと。本能寺には残念ながら彼らを同行させなかったのだろう。

大相撲は過去、大きな変革に二度遭遇した。最初は寛文・延宝期の17世紀後半に「土俵」が誕生、相手が倒れるまで勝負がつかなかった相撲に、「寄り切り」や「押し出し」という勝ち方が生まれ相撲の技が飛躍的に発展した。もう一つの変革は明治42年に東京・両国に初代「国技館」が完成し、「晴天10日間興行」だった相撲が屋根のある競技場で定期的開催されるようになった。「1年を20日で暮らすいい男」という川柳があるように、春と秋の二度、本所・回向院を中心に「晴天10日、寺社の境内で興行」だった勧進相撲が、その後の曲折を経て15日制に定着したのが昭和24年、現在の六場所制になったのは昭和33年。これより早く、昭和3年にラジオ放送が始まり、進行を早めるための「制限時間」が定められ、同時に立ち会いの呼吸を合わせやすいように「仕切り線」も設けられた。その三年後に土俵の直径が13尺(3.94m)から15尺(4.53m)に拡張された。

先日、テレビで昭和の名勝負といわれている栃錦と若乃花、大鵬と柏戸の対戦を観た。立会が現在とは大きく異なり、両手を土俵につけずに呼吸だけを合わせ、中腰の姿勢で相手とぶついていた。最近は両手を土俵につけて立ち会うことを厳しく指導してきたお蔭で、両力士がぶつかる迫力が大幅にアップした。立会一瞬の変化によるあっけない決まり手も増えたが、昭和の相撲より現在の方が、緊迫感と迫力が強まり、さらに格闘技の美しさも増したと思う。これも大相撲の歴史の中で、「改革」の一つになるのだろう。

横綱白鵬の活躍が群を抜いており、孤軍奮闘の感がある。あっという間に大鵬の記録を塗り替えた優勝回数よりも、横綱に昇進してから一日も休んでいないのが凄い。横綱に昇進後、今年の七月場所まで 50 場所皆勤である。横綱昇進後の 50 場所の間に途中休場も含め、大鵬は 11 場所、千代の富士は 8 場所も休んでいる。その間の優勝回数は大鵬と千代の富士がともに 27 回、白鵬が 32 回、当然の結果と言える。

今年の九月場所の番付表(予想)では、幕内力士 42 人中、外国人が 18 人、40%を超える力士が外国人、さらに役力士では 11 人中 3 横綱を筆頭に 5 人が外国人である。1992 年、6 人のモンゴルの若者が来日し史上初のモンゴル出身力士となった。その中の一人が「旭天鵬」である。来日してから 20 年後、3 年前の五月場所、平幕の「旭天鵬」が優勝決定戦を制し、初めて賜杯を手にした。史上最年長の幕内優勝だった。今年の七月場所を終え、幕内通算出場 1470 回、五月場所の五日目に「魁皇」の記録を塗り替え、これまた前人未踏の大記録を打ち立てた。そして、七月場所千秋楽後に白鵬の優勝パレードの旗手を務め、翌日、引退を表明した。



白鵬の将来について、気がかりなことがある。相撲部屋の親方になるためには「日本国籍を有する者に限る」というのが相撲協会のルール。「曙」や「武蔵丸」など多くの外国人力士が帰化して日本国籍を所有、「旭天鵬」も取得した。白鵬はまだ取得していない。モンゴルの国民的英雄でもある白鵬の父のムンフバトさんは息子の国籍変更には難色を示しており、国民も同様と伝えられている。遊牧民国家のモンゴルの男子は生まれた順に独立し、末子が家督を相続するのが慣例とのこと。白鵬は末子、このことも影響しているのかもしれない。白鵬の引退後は、親方になってもらい、後輩力士の指導に尽力してほしいと相撲ファンは誰もが願っている。でも、北の湖理事長は相撲協会のルールを変える気はなさそう、現役の時の相撲の取り口に似てかなり頑な姿勢、国技なので「伝統」は守るとのこと。まだ先のことだが、どうなることやら・・・。2015-8-29

## あなた 何ができますか

高松 良晴

夏の盛り、天気快晴、傘寿から喜寿、古希、還暦の山仲間総勢 30 人、福島  
の安達太良山系鬼面山（標高 1,481m）、ブナ林を抜け、頂上で、吾妻連峰の  
山並み、福島市街を遠望しながら、健康を祝し乾杯。

麓の露天風呂でゆったりと語り、夕べの大広間、持ち込みの銘酒 16 本が舞  
台に並び、感性豊かな芸達者ばかり、スコップ三味線、民謡踊り、どじょう  
すくい、仮装漫才、次から次に、無芸の我が身、ただ茫然と眺めるだけであ  
る。ただ、芸は、歌や踊りばかりではない。

「日本の鉄道の運行は正確だ」と、よく言われる。皆、その鉄道現場を支  
えた人々ばかり。宴の席では、蒸気機関車運転、新幹線乗務、列車運行管理、  
車両故障、電気設備点検、線路保守、除雪、災害復旧、組合活動等々の体験  
談が飛び交う。数少ない現職の若手が、と言っても還暦だが、酒瓶片手に相  
槌を打っている。

だが、鉄道の昔語りばかりでない。今日現在、日々の活動のことにも話が  
及ぶ。それぞれ、各自の技量・能力を活かしての、小学生達を引率しての登  
山会、朝 4 時から畑に出ての専業農家、店舗・事務所の受電設備点検、冷暖  
房施設の管理保守、マンション管理人、町内会の取りまとめ、市町村の評議  
員、町内広報紙の執筆発行、趣味の会の事務局長、民生委員、介護、老人施  
設の慰問、地元自治体の命の相談員、OB 会幹事、山の写真、DVD 製作、等々。

語る顔には、ツヤがあり、目は輝いている。昔は昔、今は今である。  
宴の締めは、全員起立、肩を組んでの、山の会の歌の大合唱。銘酒 16 本、2  
～3 本残るも、空っぽに。初めから終わりまで、酒に乱れる者なく、友の健康・  
病を気遣うも、世に媚びる一言もなし。

そして、筋が通らぬ発言には、即座に、びしっと、一言が返ってくる。

深夜、宿の屋上から、夜空に天の川を追う。

翌朝、また、露天風呂での語らい、山の風が爽やかに吹き抜ける。

福島駅で、「また、来年の夏、健康で会おう！」と手を振り別れる。

私も喜寿を祝ってもらった一人だった。「健康で！」と言って別れた以上、  
体力と心、二つの健康の維持に努めねばならない。体力は、小学校時代の  
先生の一言「足は第二の心臓だよ」を胸に、「いくら歳をとっても、トイレ  
だけは自力で行かなきゃ」との思いで、還暦過ぎて始めたのが、市民マラ  
ソン大会への参加だった。だが、歳をとるに従い、ゴールタイムは、ぐん  
ぐんと落ちてきた。65 歳でのフル（42 km）6 時間、ハーフ（21 km）2 時  
間 30 分が、76 歳の今では、フル 8 時間 30 分、ハーフ 3 時間 30 分となり、

もはや、参加可能な制限時間の長～い長～い大会は、もうなくなってきた。ただ、都心のコースの歩道を、歩いている方に追い抜かれながらも、のたのたと走る(?)だけだ。頑張るしかない。

コースの一つに、半蔵門～銀座～(晴海通り)～勝鬨橋～月島～(隅田川テラス)～両国橋～(靖国通り)～半蔵門(20 km)がある。商業ビルが立ち並び、人や車が行き交う雑踏の銀座四丁目交差点に立つと、いつも、角に建つ白いビル屋上の大きな時計台を見上げ、大小二つの針を追いながら、70年前、終戦直後の写真に思いを馳せる。



昭和20年(1945年)3月、米軍機B29の東京大空襲により、黒焦げのビルと瓦礫の焼野原と化した銀座周辺一帯、その中で、四丁目交差点角に、時計台のある白いビルだけが、すっきりと立っている。

同じ銀座四丁目、戦後2～3年後の写真を見ると、すっかり現況に近い街に復旧・復興している。これは、他の都市でも同じ。10年後の昭和31年(1956年)度の経済白書は、「もはや戦後ではない」と、高らかに謳い上げ、我が国経済は高度成長の時代へと向かって行く。

どうして、短期間にこのように復興できたのだろうか。

世界の政治・経済情勢の影響もあっただろうが、思うに、日本人の好奇心と律儀な勤勉実直さ、そして、その人達の層の厚さ。何事においても、どのような方針・計画を描こうとも、それが行われる現場で理解され、状況変化に対応して着実に実行されて行かないかぎり、実現はない。実現しても、さらに改善され普遍的に拡がり、汎用化して行くには、多数有能なスタッフの存在が欠かせない。

列車の運行一つをとっても、スタッフの誰しにも、ダイヤ・信号・機器・

走行状況の確認を確実にし、臨機応変に変化に対応出来る体力・思考の能力が求められる。そして、現場での体験・知識が、一人ひとりを、腕と感性のある、かつ、自らの仕事に誇りを持った、職人へと育て上げて行く。その後、新たに別の分野の仕事に就かれても、何事にも十分通用する力量を持った、自立した職人となっている。多くの各分野において、このような人々が、これまでの我が国の復興・発展を支えてきたのであり、その人々の層の厚さこそが、我が国の力の源泉であった、と思う。福島で、山に登り、湯に浸かり、語り合った、仲間達の顔が重なる。

我が国は、江戸幕末から、明治維新、日露戦争、太平洋戦争、戦災復興など、それぞれの内外からの借入金を一切踏み倒すことなく、これまで着実に返済してきている。東北大震災時にも、略奪はなく、ゴミの分別がなされ、駅のホームでは、きちんと並んで電車を待っている。外国の方は、「我々だって、勤勉に対処してきている。なぜ日本人だけなのか」と言われる。

温暖な四季、多神教の世界、農耕民族、外国に征服されていない、島国、単一民族国家、等々が考えられるが、どれも、そうだ、と言い切れるものではない。今は、「どうしてなのかな」と思うのみである。

遅きに失したが、歳をとって感じることもある。独自の腕や芸のある人は、いつまでも元気だし、感性豊かである。落語家の真打は死ぬまで高座で演ずるし、元気である限り、漁師は漁に出るし、農家は田畑を耕す。皆、世の中のお役に立つ、生涯現役である。

一方、組織の中で、家庭の中で、自らは動かず、こうしろ、ああしろ、と言うだけで過ごしてきた、我が身は大変だ。「あなた一人で、何ができますか」と問われても、ここでも、「うーん…」とじっと腕を組むだけだった。でも、最近では、「朝夕の食事の支度と後始末が出来る」と言えるようになった。以前から、我がカミさんは、「主婦は総合職」と言っている。食事の支度は、その一部に過ぎないが、タイミング、食材の在庫管理、買い出し、財布の具合、各人の好み、健康、メニューの作成、調理の手順、後片づけ、等々、総合的に判断しなければならいことが多い。カミさんから教わった料理の手順、分かりやすくシンプルで、料理の幅も広がってきた。スーパーの中を、美味しくそうで安い食材を求めて、何度もぐるぐる回るのが楽しくなってきた。これが、目下の心の健康維持への手立ての一つとと思っている。

東北の山仲間との集い、来年の夏は、宮城県内の山とのこと。蔵王だろうか、栗駒だろうか。「80歳までは来いよ」と声をかけて頂いた。有難いことだ。また、一緒に山に登り、麓の露天風呂に浸かり、酒の瓶が並ぶ大広間の宴で、語り、肩を組んで歌いたい、と願っている。(2015年8月27日記)

◆特別寄稿◆ 震災レポート No14 (2015/8/15) 渡辺陽一

大震災から5年目、復興の現状と課題

～ 進展の一方 復興の地域・個人差が大きく 前に進めない被災者も ～

政府が定めた2015年度末を期限とする「集中復興期間」が間もなく残り半年を切ろうとしている。宮城県内の被災地では、遅れていた名取市閉上が昨年秋、浸水地での現地再建を基本とした土地区画整理事業に着手し、ほぼすべての地域で復興の槌音が響くようになった。トップランナーとなった岩沼市玉浦西地区の集団移転をはじめ工事が進んでいる所では新しい住宅が姿を現し、転居してきた被災者の生活が始まった。ようやく希望の光が見えてきた思いがするが、それは全体の一部でしかない。まだまだ多くの人々が仮設住宅などで不自由な暮らしを余儀なくされている。

この1年を振り返ってみると、思い描いたスピード感とはほど遠い歩みながらも復興が確かな前進を見せる一方で、復興の地域差や個人差が大きくなった感がする。「住まい」と「働く場」を取り戻せない被災者の我慢も限界にきている。春以降行われている地方選で、本年度末に市の震災復興計画が終了する仙台市議候補者は「ポスト復興」のまちづくりを訴えていたが、復興を実感できない沿岸自治体ではなお「復興の方向」を争点にしている。温度差がある証左である。

県などの公表データと定期的に行っている定点観測地での聴き取りにもとづき宮城県内の復旧・復興の進捗状況（6月末）を概観するとともに、現状における課題などを挙げてみたい。

### 仮設暮らしは半減に 高齢・独居化進む

被災者の約半数の人（57.6千人、25.5千世帯）は4年5ヶ月経った今も不自由な仮設住まいを強いられているほか、県外避難者も7.1千人いる。阪神・淡路大震災時には現地再建で住宅整備が比較的早く進み、震災発生丸4年後で仮設入居率は13.5%、5年でほぼ全世帯が仮設を脱した。“土地被災”の様相を呈した今次震災では、移転予定地の造成工事や新たな宅地を求めて行われる公的住宅の整備に時間を要して計画通り進まない。県は仮設住宅の入居期間について自治体が一律1年延長する現行制度に加え、入居6年目からは自治体が世帯ごとに判断する「特定延長」を導入する方針を打ち出した。住宅整備の計画はあるが工事の遅れなどで入居期間の5年以内に仮設を出られない世帯、移転予定地の造成工事が完了していない世帯などに限り、入居期間を1年延長するというものである。

これに対して、住宅の再建方針が決まらない被災者や高齢世帯、独居高齢世帯を中心に不満を訴える声が上がっている。仮住まいの55%はプレハブ住宅（残りは民間の賃貸住宅を活用）であるが、65歳以上の高齢者が占める割合は44%（県の平均24.8%）に上り、また、独居高齢世帯も26%に達し、経済的問題に加え、転居先での人間関係やコミュニティに懸念を抱く被災者が多い。集団移転や災害公営住宅での再出発を期す被災者がいる半面、仮設住宅からの退去が困難な世帯も確実に増えているのが現実である。長期化に伴う居住環境の改善とともに、自立への支援強化がより求められているところである。

### ピーク迎える住まい整備 完了まで早くて後3年余

\* 防災集団移転促進事業（宅地造成）：195地区（A）

うち住宅等建築可能となった地区109（B）

仙台市 A14-B14、石巻市 56-25、気仙沼市 51-20、南三陸町 26-20、女川町 22-7、東松島市 7-6、岩沼市 2-2、亘理町 5-5、山元町 3-2

\* 土地区画整理事業（復興まちづくり、住まいの現地再建）：34地区（A）

うち完成0（B）

仙台市 A1-B0、石巻市 14-0

\* 上記2事業用地での住宅計画：10,466戸

うち完成（4月末現在）2,351戸

\* 災害公営住宅計画：242地区15,914戸（A）うち完成6,309戸（B）

仙台市 A3.179-B2.476、石巻市 4.500-1.116、気仙沼市 2.139-185、南三陸町 738-104、女川町 860-230、東松島市 1.010-412、岩沼市 210-210、亘理町 477-477、山元町 484-353

高台や内陸部での防災集団移転促進事業による宅地造成は、一部完成の地区を含め半数以上の計画地区で住まいなどの建築が可能となったが、住宅を建て終えたのは移転希望者の22%、また、自力再建が困難な被災者向けの災害公営住宅の整備は40%であり、今後順調に進んでも必要な住宅の整備が完了するまでには少なくとも後3年以上は必要と言われている。

上記に見る通り、政令指定都市として事業推進力のある仙台市や住民主体の議論が復興の歩みをリードした岩沼市、震災前から協働まちづくりの主役であった市内8地域の分権型自治組織が共助と住民合意に大きな力となった東松島市などは高い進捗率にある。しかし、被災地域が市中心部、内陸部、半島部と広範囲におよぶ石巻市や気仙沼市、女川町などでは数も多く遅れが目立つ。

住まいの整備がピークを迎える中、当初の計画と被災住民の希望とのずれが広がりを見せ苦慮している自治体もある。家族の分散、高齢化、所得減で住まい再建を諦め災害公営住宅に変更したり、家賃負担のかかる公営住宅で



の入居をためらう世帯が時間の経過とともに相次いでいるからである。

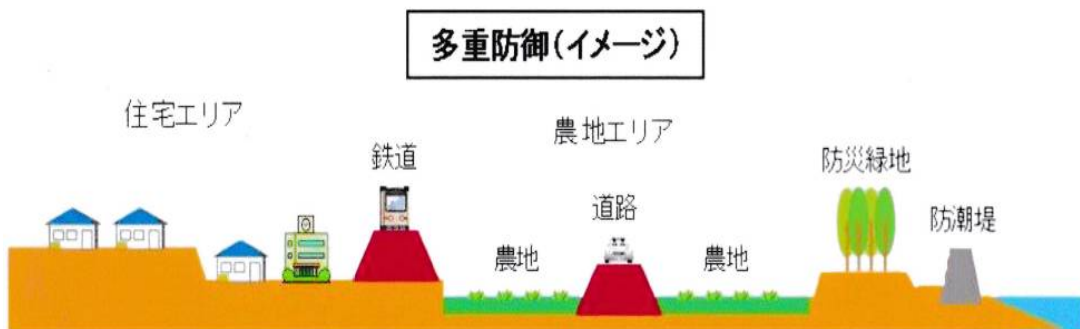
2,3 例を挙げてみる。県南の亘理町は5 地区で造成した集団移転分譲宅地の約1 割(20 戸分)に空きが生じ、完成した災害公営住宅も4 分の1(117 戸)が埋まらない。また、山元町は当初計画を縮小したが、3 地区の分譲宅地のうち約3 割(85 戸分)が宙に浮く一方、災害公営住宅は484 戸の募集戸数を上回る見通しにある。

石巻市の半島部では高台61 地区で1,785 戸分の宅地造成を計画したが、希望を取り下げる被災者が続出し48 地区1,261 戸まで縮小した。ただし、現状では3 分の1の地区で高台移転の世帯数が10 戸に満たない小集落であり、しかも、住み続けることを希望するのは高齢者が多く、集落存続の危機にさらされている。

一方、土地区画整理事業の進み具合は10%に満たない。津波被災地で道路や用地の地盤かさ上げを伴う事業であり、上物建築までには時間を要するため地権者間の折り合いも難しく未着工も見られる。また、市街地再開発事業についても、再建を果たした商店主がいたり、保留床の処分見通し不安などから、石巻市中心部では6カ所の計画のうち3ヶ所が白紙に戻されており、商店空洞化にさらなる拍車がかかるものと懸念が広がっている。

### 時間のかかる多重的津波減災対策

津波で被災した沿岸部は防潮堤、海岸防災林、かさ上げ道路などの多重的な津波減災対策で護る計画である。(下記イメージ図参照)



(出典：「宮城県震災復興計画」)

県内の河岸総延長は827km、このうち156kmが防潮堤で護られていたが、約3分の2の101kmが損壊し、新設を含め240kmを整備する計画である。

仙台空港のように沖積平野で内陸部へ奥深く行っても高台が見つからない仙台湾南部海岸線南北20数kmには、高さ7.2mの大防潮堤がいち早く完成



した。しかし、県北部は海と生活をともにしてきた地域が多く、生活・自然環境、景観が損なわれるとの問題提起がなされ折り合いがつかない。特に9.7mを超える巨大防潮堤を予定しているリアス式海岸では、これに賛同する被災者と、「高台移転で人が住まなくなった沿岸部や耕地放棄地、無人島を護るために貴重な予算を割く必要があるのか」「避難通路や避難ビルを優先すべき」と言った意見の対立もあり、防潮堤を巡る議論は迷走し県内沿岸部の海岸保全対策は20%の完成に過ぎない。

海岸防災林は櫛の歯が抜けた姿をさらしているが、クロマツ育苗事業が塩害に苦しみながらも本格的に始まった。特に仙台湾南部海岸は水位が高く深く根を張ることができないため、農水省が2mの基盤整備を行いその上に30cmに育ったクロマツの苗を移植して行くという息の長いプロジェクトである。

堤防機能を持たせる道路のかさ上げは最後の砦であり、津波被災地での復興まちづくり（商業・業務施設）には欠かせず、また、津波被災地を居住禁止の災害危険区域と現地再建可能区域に分ける境界線（線引き）の役割も持つ。県内で総延長100kmのかさ上げが計画されており、仙台湾南部の沿岸部県道（高さ約6m、上部幅10m、底部幅30～40m）や復興まちづくりが本格化した石巻市、気仙沼市、女川町などでまちづくり用地の地盤かさ上げと並行して進められている。

### **食品・水産加工業 設備復旧なるも販路回復・人手確保に難**

被災地で震災前の売り上げを取り戻した企業は建設業で72%、運輸業で48%、製造業で40%とされるが、沿岸部の産業の柱である食品・水産加工業は約20%と大きく立ち遅れている。

漁港の96%が陸揚げ可能となり、県内主要魚市場の水揚げ量も88%まで回復した。水産加工業の設備復旧も進んでいるが、総じて加工品生産額はようやく半分といった状況にある。最大の要因はいったん失った販路が戻らないこと、住まいと仕事をなくし地元を離れたり、比較的賃金単価が高い建設業などに流れた人手が帰ってこないことに尽きる。水産都市気仙沼市の場合、水産加工業従事者は震災前の約4,000人から1,500人に減った。また、養殖業は、高いシェアを持つわかめで設備が74%、生産量が71%、かき（石巻市）で設備が62%、生産量が80%まで回復しているが、販売面では、県内の生協などでも震災後並んだ他県産からの切り替えが思うように進まず苦勞している。

復旧投資を機に省力化や商品の高付加価値化に向けた設備の高度化と合わせ、逆境をばねに生産から製造、販売までを地域で取り組む6次産業化に力を注ぐなど、現状を変えようと挑戦するケースがある一方、原料供給に近い加工を主業としている企業などはなかなか一步を踏み出せず、無理な値引きにより売り上げようとして競争に巻き込まれるなど厳しい状況にあり、被災

地の中でも格差が広がっている。

このような中、復旧した主要漁港の水揚げ観測から、漁場のがれき撤去や漁港と魚市場などが復旧するまでの間の一時的な休漁が、沿岸・沖合の主要魚種の資源状態（量、体長など）に劇的な改善をもたらしていることが分かった。これは多くの漁業者の苦難の代償ではあるが、海が本来持っている生産力を再認識させられると同時に、これからの資源管理の在り方に一石を投じるものとして注目されている。

### 農業復興 二極化の様相

被災農地及び排水機場などの農業用施設は、干拓農地や河口周辺など被害が甚大な一部の地域と、農地復旧と圃場整備を並行して進めている地域を除き 8 割方復旧した。保肥力や肥沃度に乏しい山土で客土せざるを得なかったため米作営農再開ができず、暫く大豆などで様子見の農家もあるが、農地の大区画化など「攻めの農業」の試み・実践が徐々に進んでいる。一方、小規模農家の離農問題や集団営農組織においても震災前から課題であった担い手の高齢化、後継者不在が顕在化し、また、住宅整備の遅れが営農再開に与えている影響も無視できず、復興は二極化の様相を呈している。

### 第2ステージ移行に当たり“自立”を強調する前に

「集中復興期間」（2011 年～2015 年度）が残り 10 ヶ月を切った 6 月 24 日、国の復興推進会議は 2016 年～2020 年度を「復興・創生期間」と位置付け、一部事業で地元負担を導入し（事業によって最大で 3.3%）、この間の総事業費を 6.5 兆円とする方針を決めた。

2011 年秋、当時の民主党政権が復興事業を国が全額負担する方針を決め、その後の自民政権も予算を拡大したが、集中復興期間終了後の方針は明確にしてこなかった。このため、過大な復興計画と事業費負担の膨張を招いたとして制度の見直しを求める声の一部に上がっていた。また、自治体レベルでは、期間内の着工にこだわって急ぐあまり、地域や被災者ニーズの見極め、調整を欠いたまま走り出した感は否めず、計画の策定や事業の実施に歪みが出ていたことも事実である。

地元負担は、特に財政力が脆弱な沿岸部自治体の強い要望を受け、二転三転のうえ総事業費の 0.34%に抑える形で決着をみた。この政策転換を機に、ミスマッチが顕在化している住まいや復興まちづくり、住民の合意を得られず難航している防潮堤整備などの事業見直し、方向転換に繋げることができるのか、注目される場所である。

この議論の過程で、復興相の「全額国というのはモラルハザードの原因」「自分のまちは自分で復興するという“自立”の気概を持ってもっと一段と必死のギアを上げるよう強く求めたい」といった一連の発言で“自立”が強調さ

れ、「自立」に向けて歩みを早めようと努めている被災地の神経を逆なでした。また、この発言を巡っては、沿岸部自治体首長と被災者の反発・反論に加え、「負担が伴わないと当事者意識が薄くなり地域の实情に合った住民参加型の事業に結びつかない」（寺田前秋田県知事）「一般論として、負担を伴わないと真剣な議論になりにくい」（和田東北公益文科大教授）などの識者の意見が紙面をにぎわした。

しかし、よく考えてみると、そもそも避難した被災者がようやく仮設住宅などに分散入居し、明日からの生活を思い描けずにいるような混乱の時に策定された「わがまち」の復興計画に、復興相が言う“自立”の気概で当事者意識を持って参加できた被災者はどれほどいたであろうか。また、5年目に入ってなお県外を含め避難生活をおくる人が64.7千人、プレハブ仮設入居者が30.2千人いる現状は想定されていなかったとはいえ、集中復興期間の終了は被災地の復興が当初通り進んでいることが前提となるべきではなからうか。人手・資材不足と労務費・資材高騰などもあり、復興の進捗状況の認識では被災地と政府では概ね2～3年のずれがあり、新しいステージに進むスケジュール自体が被災地の歩みとマッチングしていないと感じた県民は多いはずである。

また、自治体それぞれに被害状況、人口流失の度合い、財政力など事情が異なる。市街地全体が壊滅した自治体や半島部など広範囲に被害がおよんだ自治体の復興が遅れるのは当然で、すべての自治体に同じ5年間の集中復興を求めているのかといった疑問もある。

さらに、復興庁は、阪神・淡路大震災と比較して特別扱いであることを強調したが、阪神・淡路大震災では都市部が主な被災地となったのに対し、今回は過疎や地域産業の衰退といった自立阻害要因を抱える沿岸地域が大きな打撃を受けた。東日本大震災は大津波による広範囲にわたる“土地被災”であり、多重防御施設の構築、他所での用地探しと造成を必要とする。産業構造も自治体の財政力も大きく異なり、同列に見ること自体無理があると言える。

「自立」に踏み出そうにも基盤が整っていない。それが実情であることをしっかり押さえたうえでの議論がなされず、次のステージへ歩むスケジュールと、“自立”の証しとしての地元負担にだけ焦点を当てた議論に終始したように思えて残念でならない。

5年目に入りようやく落ち着きを取り戻した被災者の中には、国の防潮堤整備計画を疑問視する者、買い物弱者を生み出す職住分離のまちづくりについて行けない者などが積極的に問題提起する、そのような姿が見られるようになった。「被災者はどのような暮らしを望み、次代にどのようなまちを残したいのか」（寺田前秋田県知事）、いま一度地域ニーズ、被災者からの発想でしっかり考える時が来ているように思う。

なお、国は、この「復興・創生期間」で地方創生の新たなモデルを生み出すことを目指している。「働く力」、「地域の総合力」、「民の知見」を引き出して、震災前から自立が困難であった地域の自立を導き、その成果を全国の同じ問題を抱える地域の振興策に生かそうというものである。より一層の創意工夫ある取り組みが求められているところである。

震災の記憶の風化は確実に進んでいる。地元では毎月11日に特集を組むなどの報道を目にするが（「月命日放送」とも言われている）、被災地を遠く離れた地域では少ない。報道されても復興なった姿の紹介が多く、被災地の実態は知られない。情報が発信されずに風化が進むことは正確な情報が届かず、未だ深刻な状況にある風評被害を払拭できないことにも繋がりがかねない。

被災地を歩くと、被災者の涙ぐましい知恵と努力によって、震災前からあった自治組織の総意を活かしたまちづくり（東松島市）、コミュニティーぐるみの集団移転（岩沼市）、助けを必要とする世帯とこの世話をする世帯が隣同士になれるペア入居（山元町）、高齢者や弱者の見守りサポート（女川町）、地域に眠っていた文化や風習の見直しによる新たなビジネスの創設（亶理町）などの素晴らしい成果を見ることができる。しかし、一方では、復興が進展するだけで前に進めない被災者がいて、もともと高齢化率が高い沿岸部では時間の経過とともに現実の壁が高くなっている。コミュニティーが弱くなって人と人との繋がりが希薄になり、復興を巡っての対立や格差が生まれてもいる。それだけに、被災者の暮らし再建の支えや前に進めない弱者に寄り添うソフト事業がより重要になっているが、その行方はなかなか見通せない。第2のステージへ進む予算議論の影響で後退することがないことを切に願うばかりである。

## TEA TIME

この記事は9. 11の日、デルタ航空15便の乗務員と乗客の記録です。

突然米国本土全面着陸不可となった飛行機は、Newfoundland の Gander に着陸することになりました。数時間後には60に近い飛行機が世界中から避難してきました。218名の乗客はGanderから45キロにある Lewisport という町で過ごすことになりました。乗客たちがそれからどのような経験をしたか、なぜ飛行機に戻った乗客が一つの家族のようになったのか、150万ドルの奨学金が集まり134名の学生の奨学金となったのか、お読みください。



### Take a Gander at This Amazing, Yet Little Known, 9-11 Story

From a flight attendant on Delta Flight 15, written following 9-11: Posted Sun Oct.7<sup>th</sup> 2001, 08:43 local time

On the morning of Tuesday, September 11, we were about 5 hours out of Frankfurt, flying over the North Atlantic. All of a sudden the curtains parted and I was told to go to the cockpit, immediately, to see the captain.



As soon as I got there I noticed that the crew had that “All Business” look on their faces. The captain handed me a printed message. It was from Delta’s main office in Atlanta and simply read, “All airways over the Continental United States are closed to commercial air traffic. Land ASAP at the nearest airport. Advise your destination. ”No one said a word about what this could mean. We knew it was a serious situation and we needed to find terra firma quickly. The captain determined that the nearest airport was 400 miles behind us in Gander, Newfoundland. He requested approval for a route change from the Canadian traffic controller and approval was granted immediately — no questions asked. We found out later, of course, why there was no hesitation in approving our request. While the flight crew prepared the airplane for landing, another message arrived from Atlanta telling us about some terrorist activity in the New York area. A few minutes later word came in about the hijackings.

We decided to LIE to the passengers while we were still in the air. We told them the plane had a simple instrument problem and that we needed to land at the nearest airport in Gander, Newfoundland, to have it checked out. We promised to give more information after landing in Gander. There was much grumbling among

the passengers, but that's nothing new! Forty minutes later, we landed in Gander. Local time at Gander was 12:30 PM .... that's 11:00 AM EST.

There were already about 20 other airplanes on the ground from all over the world that had taken this detour on their way to the US. After we parked on the ramp, the captain made the following announcement: "Ladies and gentlemen, you must be wondering if all these airplanes around us have the same instrument problem as we have. The reality is that we are here for another reason." Then he went on to explain the little bit we knew about the situation in the US. There were loud gasps and stares of disbelief. The captain informed passengers that Ground control in Gander told us to stay put. The Canadian Government was in charge of our situation and no one was allowed to get off the aircraft. No one on the ground was allowed to come near any of the air crafts. Only airport police would come around periodically, look us over and go on to the next airplane.

In the next hour or so more planes landed and Gander ended up with 53 airplanes from all over the world, 27 of which were US commercial jets. Meanwhile, bits of news started to come in over the aircraft radio and for the first time we learned that airplanes were flown into the World Trade Center in New York and into the Pentagon in DC. People were trying to use their cell phones, but were unable to connect due to a different cell system in Canada . Some did get through, but were only able to get to the Canadian operator who would tell them that the lines to the U.S. were either blocked or jammed.

Sometime in the evening the news filtered to us that the World Trade Center buildings had collapsed and that a fourth hijacking had resulted in a crash. By now the passengers were emotionally and physically exhausted, not to mention frightened, but everyone stayed amazingly calm. We had only to look out the window at the 52 other stranded aircraft to realize that we were not the only ones in this predicament. We had been told earlier that they would be allowing people off the planes one plane at a time. At 6 PM, Gander airport told us that our turn to deplane would be 11 am the next morning. Passengers were not happy, but they simply resigned themselves to this news without much noise and started to prepare themselves to spend the night on the airplane.

Gander had promised us medical attention, if needed, water, and lavatory servicing. And they were true to their word. Fortunately we had no medical situations to worry about. We did have a young lady who was 33 weeks into her pregnancy. We took REALLY good care of her. The night passed without incident despite the uncomfortable sleeping arrangements. About 10:30 on the morning of the 12th a convoy of school buses showed up. We got off the plane and were taken to the terminal where we went through Immigration and Customs and then had to register with the Red Cross. After that we (the crew) were separated from the passengers and were taken in vans to a small hotel.

We had no idea where our passengers were going. We learned from the Red Cross that the town of Gander has a population of 10,400 people and they had

about 10,500 passengers to take care of from all the airplanes that were forced into Gander! We were told to just relax at the hotel and we would be contacted when the US airports opened again, but not to expect that call for a while. We found out the total scope of the terror back home only after getting to our hotel and turning on the TV, 24 hours after it all started.

Meanwhile, we had lots of time on our hands and found that the people of Gander were extremely friendly. They started calling us the “plane people.” We enjoyed their hospitality, explored the town of Gander and ended up having a pretty good time. Two days later, we got that call and were taken back to the Gander airport. Back on the plane, we were reunited with the passengers and found out what they had been doing for the past two days. What we found out was incredible.....

Gander and all the surrounding communities (within about a 75 Kilometer radius) had closed all high schools, meeting halls, lodges, and any other large gathering places. They converted all these facilities to mass lodging areas for all the stranded travelers. Some had cots set up, some had mats with sleeping bags and pillows set up. ALL the high school students were required to volunteer their time to take care of the “guests.” Our 218 passengers ended up in a town called Lewisporte, about 45 kilometers from Gander where they were put up in a high school. If any women wanted to be in a women-only facility, that was arranged. Families were kept together. All the elderly passengers were taken to private homes. Remember that young pregnant lady? She was put up in a private home right across the street from a 24-hour Urgent Care facility. There was a dentist on call and both male and female nurses remained with the crowd for the duration. Phone calls and e-mails to the U.S. and around the world were available to everyone once a day.

During the day, passengers were offered “Excursion” trips. Some people went on boat cruises of the lakes and harbors. Some went for hikes in the local forests. Local bakeries stayed open to make fresh bread for the guests. Food was prepared by all the residents and brought to the schools. People were driven to restaurants of their choice and offered wonderful meals. Everyone was given tokens for local laundry mats to wash their clothes, since luggage was still on the aircraft. In other words, every single need was met for those stranded travelers.

Passengers were crying while telling us these stories. Finally, when they were told that U.S. airports had reopened, they were delivered to the airport right on time and without a single passenger missing or late. The local Red Cross had all the information about the whereabouts of each and every passenger and knew which plane they needed to be on and when all the planes were leaving. They coordinated everything beautifully. It was absolutely incredible.

When passengers came on board, it was like they had been on a cruise. Everyone knew each other by name. They were swapping stories of their stay, impressing each other with who had the better time. Our flight back to Atlanta looked like a chartered party flight. The crew just stayed out of their way. It was

mind-boggling. Passengers had totally bonded and were calling each other by their first names, exchanging phone numbers, addresses, and email addresses. And then a very unusual thing happened.

One of our passengers approached me and asked if he could make an announcement over the PA system. We never, ever allow that. But this time was different. I said "of course" and handed him the mike. He picked up the PA and reminded everyone about what they had just gone through in the last few days. He reminded them of the hospitality they had received at the hands of total strangers. He continued by saying that he would like to do something in return for the good folks of Lewisporte. "He said he was going to set up a Trust Fund under the name of DELTA 15 (our flight number). The purpose of the trust fund is to provide college scholarships for the high school students of Lewisporte. He asked for donations of any amount from his fellow travelers. When the paper with donations got back to us with the amounts, names, phone numbers and addresses, the total was for more than \$14,000! "The gentleman, a MD from Virginia , promised to match the donations and to start the administrative work on the scholarship. He also said that he would forward this proposal to Delta Corporate and ask them to donate as well.

As I write this account, the trust fund is at more than \$1.5 million and has assisted 134 students in college education. "I just wanted to share this story because we need good stories right now. It gives me a little bit of hope to know that some people in a faraway place were kind to some strangers who literally dropped in on them. It reminds me how much good there is in the world."

"In spite of all the rotten things we see going on in today's world this story confirms that there are still a lot of good people in the world and when things get bad, they will come forward.



## 少女

野田とし子

アブラゼミの音が小さくなり ミンミンゼミとツクツクボウシが加わった庭の音楽隊 秋の近づきを告げているような日の午後だった。

仕事開始とともにスイッチを入れたラジオ こちらも混声の合唱である。二つの合唱を重ねて聴いているうちに もう盛りの時期を過ぎたような蝉の音が 妙に愛おしく思えてきて 聴き入っていた。

いくらか時が流れたころ 何かを叩くような音がしたようで 手を止めて耳を澄ました。

塗り部屋に隣接する車庫は木造で 屋根はあるけれど囲いはない。誰でも這入れる。しかし 声は無い。

毎年この季節 必ず音もなくやってきて ツンツンとガラス戸を叩くヤカラがいる。 オニヤンマだ。 今年の初来房かな？ 期待したが・・・ 塗りの途中で すぐ立つことも出来ず 空耳だったのかも？ と思いなおし置いていた刷毛に手をのばした。

間もなく 今度は確かに 音は遠慮気味であるがトントンと聞こえた。

「はあーい」と応じて そおーと立ち上がり 窓辺に行くと 小さく微笑み見上げている少女の姿があった。

「ナナちゃん？」

少女は 笑みを大きくして頷いた。

今は5年生 すっかり少女のスタイルになっている。

「居間の方に行って待っててくれる？ 2～3分で行きます」

ナナちゃんは 更に大きく頷いた。

私は 小躍りせんばかりに嬉々としている自分に驚きながら 何より大事な  
刷毛だけは始末をしなければならない と油箱に向った。

ナナちゃんが 我が家に初めて姿を見せたのは 白木蓮の花の頃だった。

道と敷地の区切りも無い庭に立つ白木蓮は 樹齢35年も経っていたろう  
か 既に10メートルあまり 2階の屋根を見下ろすほどになっていた。

その日は 真っ青の空に眩しいほど白い花が満開を迎え チラリホラリと  
花弁を落とし始めていた。

近くの参道には これから見ごろになる桜が並んでいる。

三日見ぬ間の桜かな というけれど 白木蓮の美しい時は 桜より短い。

桜は色の美しさを残したまま散るが 白木蓮はセピア色で如何にも哀れを感じさせる。

そんな思いを馳せながらぼんやりと眺めていた。

すると 往ったり来たりしている小さな人影が目飛び込んできた。

見たことのない 長い髪の子である。

外にでた私は ゆっくりと女の子に近づいた。

女の子の掌には 手のひらより大きな花びらが 大事そうに載っている。

黙ったまま私の目をみた。

「こんにちは」

「こんにちは」

「花びらで何をつくるの？」

「おばあちゃんにあげる」

「おばあちゃんのおうちはどこ？」

少女の指差す方向で 直ぐ見当が付いた。

「お祖母ちゃんは〇〇さん？」

少女はコックリと頷いた。

名前はナナちゃん 一年生 お兄ちゃんとお祖父ちゃんお祖母ちゃんのお家に遊びに来てお泊りをしている . . . . . ひとつづつ落ちてくる花びらを舞うように集めながら ナナちゃんは次ぎ次ぎとお話しをしてくれる。

そこへ 三男がやって来た

ナナちゃんを「〇〇さんのお孫さん」と説明しながら紹介すると 三男は察知早く「△△△ちゃんがお母さんでしょう？」とナナちゃんに懐かしそうに話しかけた。

「どうしてお母さんの名前をしってるの？」 ナナちゃんの口が尖んがった。

「小さい時 おじさんもここに住んでいたから 一緒に遊んだんだよ」

ナナちゃんの顔が元に戻り お話が続いた。

花びらがいっぱいになると「バイバアーイ」 大きく元気な声だ。

お祖母ちゃんの家に戻っていった。

翌日 朝からやってきたナナちゃんは 草取りをしている私を見ると直ぐいなくなった。そして 再び現れた姿の小さな手には草掻き鎌が握られていた。

あれから4年半も経ったなんて・・・

刷毛を洗い終えた私は 居間へ急いだ。

ナナちゃんは 「どうぞ！」の声を待ち兼ねたかのように 靴を揃えて這入って来て 一緒に卓を囲んだ。

「お絵描きは自分の家でしたけれど お習字はお祖母ちゃんの家にしにきたの（どうやら 夏休みの宿題の最後の追い込みらしい）

大きいお兄ちゃんは来年大学生になるの ガソリンスタンドでバイトしてるけどね 人がいないから たくさんお金貰えるんだって 原チャリで行くんだよ（高校から帰ってから きっと雨の日も原チャリでガンバルお兄ちゃん）

小さいお兄ちゃんは来年高校受験だから勉強ばっかり 音が勉強の邪魔にな

るから 夜はテレビ見ないんだ！

お母さんは 会社から帰ると5キロも走るんだよ (お仕事で) 疲れてるの  
にね……」

ナナちゃんは絵を描くように話し続ける

「おかあさん 走った後にお食事の支度 大変ね？」

「お母さんはお昼に会社から帰ってきてご飯を作ってくれて 夜は温めて食  
べるの 小さいお兄ちゃんも作ってくれる 上手なんだよ 美味しいんだよ」

話の合間に 西瓜と巨峰をたのしむように口に運ぶナナちゃん

冷蔵庫で退屈をしていた冷菓たちも出番がきて喜んでいるようだ。

私も耳を傾けながら (ひとりで食べるよりずっとおいしい) と感じている。

話は尽きなかったが 30~40分経っただろうか ナナちゃんは思い出  
したように「お祖母ちゃんが 遅いお昼だけお素麺作ってるからね と言  
ったから」 と突然帰ることに。

「スイカとブドウ 先に食べちゃったけどね！」

と お祖母ちゃんに すまなそうな顔がお茶目にもなったナナちゃん

お祖母ちゃんへのお土産の梨を大事そうに抱えて 「ありがとう」

ピョコンとお辞儀をした。

庭に出て 一度立ち止まり 振り返り 私に手を振った。

深い緑の葉をたわわにつけた枝を力いっぱい広げて抱える白木蓮

あの頃より一回り大きくなった樹の下で グレーのワンピースに

ポニーテールの柔らかい髪が 右に左に揺れて輝いた。

食卓に戻ると 果物を載せた皿が シンクの側にフォークと揃えて

置かれていた。

## ハーモニカ

高松 泰代



20ページほどの絵本を毎日声をだして読んでいます。  
一か月ほど前ふと手にした絵本。  
絵のタッチに魅かれたのですが、読み終わったとき ‘あ、  
この絵本の中に入りたい’

An old man lived by himself in a cabin near the railroad track in the state of Georgia.

この本のタイトルは Georgia Music

Georgia が米国のどこにあり、どんなところかしりませんが、絵とこの最初の文でわかります。それだけで大好きになりました。家は大きくない、近くにローカルな鉄道が走っている、でもきっと一日に数本。家には庭があり周りに木々がありそう。川か池があったら良いのだけれど。おじいさんって幾つぐらい？一人で住んでいるのだから、まだまだ元気。

He spent his winters doing odd jobs and watching the trains go by and thinking about old times.

きっと冬はかなり寒いところ。でも家の中ですることはあれこれあるものです。時々通る列車が見える大きな窓があって、若いころあちらこちら出かけたこと、奥さんと一緒のころ、家族や友達と賑やかに過ごしたころは、空気の流れのように思いだされる。



But as soon as it was spring he put on his straw hat, pulled his hoe out from under the porch, and chopped out a good-sized patch of garden beside the cabin. Then all summer long he worked in that garden, growing collards and melons and black-eyed peas.

やっぱりおじいさん元気。春が来たら庭仕事の道具鍬を手にして、せっせと庭の手入れをしていろんな野菜を育てて、忙しいのです。キャベツ、メロン、豆・・・

One summer the old man's daughter took the train from Baltimore to Georgia

for a visit and she took her own daughter along with her. After a few days she had to get back to Baltimore, but she left the girl there with her grandfather for the whole long summer.

.... When she stopped being shy of her grandfather she liked him, too. She followed him around his garden while he worked.



娘さんが自分のお子さんを連れてやってきました。きっと Baltimore は都会なのでしょう。

お母さんは三日で帰っていったのですが、女の子はおじいさんと一緒に夏休み中一緒に過ごすことになりました。きっとおじいさんと女の子は最初ぎこちなかった。お母さんが一人でおしゃべりしていたでしょうから。でもしばらくして女の子はおじいさんの住まいが気に入って、庭仕事しているおじいさんの後についてまわりはじめました。お食事はきっとおじいさんが作っているお野菜がいっぱい、なんでも自分でするように育てられているアメリカの男性ですからパンも簡単に作ってくれたと思うのです。

He found her an old straw hat and hoe that wasn't too heavy and showed her how to chop weeds. It was hard work, and at first she was slums at it, but the old man said he didn't know how he'd ever done without her.

おじいさんと一緒に庭仕事を始めた女の子。最初はうまくいかないのは当たり前。おじいさんは決して‘教える’なんてことしないで、‘一緒に仕事できて助かるよ’とつぶやいていました。



They would work all morn...while a mockingbird flew from fence post to fence post, flapping his wings and singing noisy songs at them. ‘Sassy old bird’ the man would say, and the girl would say it, too, ‘Sassy old bird,’ and they would look at each other and laugh out loud.

女の子はもうおじいさんと’一緒に働く仲間‘ ツグミ鳥が飛び回って鳴く。’ 図々しい鳥じゃ ‘と言っておじいさん女の子は一緒に大声で笑ったのでした。

At noon they sat under a tree and ate their lunch, and they would lie back on



the grass and rest. ....It was so quiet that they could hear the leaves touching each other, and the bumblebees bumbling, and the crickets and grasshoppers whirring and scratching.

And every now and then the old man would nod his head under his straw hat and say, "Now, that's music."

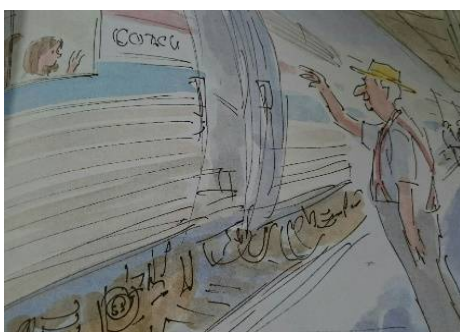
想像しているだけで幸せになるひと時です。やはり木々があるところなのです。お昼時大きな木の下で、ランチを食べお昼寝。とっても静か、葉っぱのふれあう微かな音、虫たちのとびはね動き回る音。おじいさんがつぶやきます。そう、これが、音楽じゃ！ ‘

In the evenings the two of them sat out on the rickety porch steps and the old man played tunes on his mouth organ. He knew a lot of songs and he taught the words to the girl so she could sing with music.



素敵！ おじいさんはハーモニカの名手。夕方になるとポーチに座っていっぱいいろいろな曲を吹いて、女の子と一緒に唄えるようになっていきました。雨が降ったりする日もあったのですが、きっとおじいさんはどんなお天気の唄も知っていたでしょう。二人のライブコンサート。自然の音楽と一緒に聞こえてきます。

When September came the girl didn't want to go home and she could see that her grandfather was sorry, too. Her mother promised that she could come back next summer, and they had to be satisfied with that.



学期が始まる九月、女の子を迎えにお母さんがやってきました。今や'仲間'の二人にとって辛い別れです。来年の夏までは長い。でも'来年の夏になれば！'と思ひましよう。

'I am not sick,' he told them. 'Just mighty tired.'

But they closed up the cabin and took him back with them to Baltimore. There was nothing wrong with their home in Baltimore, but the old man wasn't happy there. He sat in a chair looking worried and sad, and the girl knew he

was thinking of the old cabin and the garden that didn't get planted that year. 次の夏がやってきました。女の子はわくわくしながらおじいさんの家へ。でも草ぼうぼう。おじいさんは' 病気じゃないんじゃ。ただひどく疲れてるだけじゃ ' おじいさんは女の子の家に住むことになりました。

街に住むなら、マンションに住むなら、気持ちの整理をして、新しい環境が楽しめる年齢にしなければ。 困ることはなくても、おじさんが、気力をなくしてしまうのは極く自然なことです。



One day the girl got out the old man's mouth organ and put it in his hand. .but he just held the mouth organ in his hand and looked at it.

元気で頼もしいおじいさんを知っている女の子は わからなかったでしょう。若い時 年取ることがどんなことかまったくわかるものではないんです。

‘あ、おじいさんハーモニカがないからだわ’ と女の子が渡したのに、おじいさんはやはりぼんやり。

The girl took it back and put her lips on it and blew, and when the old man heard the sound his eyes opened wide and he looked right at her, something he never did anymore.

So she made more sounds come out of t mouth organ, and then she began blowing in and out, finding out how it worked, at last she was able to play a little tune on it.

物事はこうやってわかっていく、身に着いてくるの、決して忘れない。

女の子はハーモニカを口に、吹くと音が出て、あれこれしているといろいろな音色、そしてメロディも。そして、おじいさんが又仲間に戻って来てくれました。しっかり女の子の目を見えています。

From then on the girl sat with her grandfather every day and practiced playing the mouth organ..... She taught herself all the old songs her grandfather had played for her, and she played them over and over. One day, after she had played everything she knew, she found herself playing a different kind of music and making up brand new songs. Except it wasn't exactly music and they weren't real songs. They were the sounds she remembered from the Georgia summer- cricket chirps and tree frog trills and bee buzzes and bird twitters.

女の子はおじいさんが吹いていた曲をひとりで吹けるようになりました。  
ある日女の子は、新しい曲を吹き始めました。それを音楽と言わない人がある  
かもしれない、唄と言わない人があるかもしれない。そう、世の中の人には‘こ  
の曲は作曲家は作詞家は~~~~’と知っていないと、人に言えないといけない  
と思っているものようですから。女の子の音楽は、おじいさんの家のあの夏自  
然の中で一緒に過ごした生き物たちの音楽を思い出して出来たものだった。

**She shut her eyes and swayed back and forth and she could almost feel the hot sun on her back and the hoe handle in her hands, and for a while it was like being right back in Georgia. Then the old man gave a little chuckle and the girl heard him whisper to himself, ‘Sassy old bird.’ So she said it, too. ‘Sassy old bird.’ And then the girl and her grandfather looked at each other and laughed out loud.**

こうやって女の子とおじいさんは夏の家にもどりました。そして行ったことのないジョージアに私も。



## 弁当と作業服

渡辺 成典

地面を焦がす陽射しに抗するように、アブラ蟬の澄んだ鳴き声が山間に届している。阿武隈高地の裾野を切り拓いた田圃の稲も、穂を付け始めていた。

梅雨が明けると、松川葉という品種の葉煙草栽培が最盛期を迎える。米作りは八十八回も手間をかけるというが、葉煙草はそれ以上だ。山の日蔭にまだ雪が残る頃、落ち葉を集めて苗床を作り、親指ほどから子どもの拳くらいに育つと畑に移植する。これがやがて180cmを超える茎立ちとなり、根元の方から団扇よりも大きな葉を18枚ほどつける。夏の太陽をたっぷり吸い込んで濃い緑から黄ばんだ頃、果実でいえば熟した時に下から順に一枚一枚摘み取っていく。暑さをすこしでも避けようと、暗いうちから起きだして白衣を着込み、父母は葉煙草畑に出ていった。風を通さない畝の間は蒸し風呂。白衣は煙草特有のヤニ（脂）でべたついて灰色に変色し、手は爪の中まで黒ずんでいる。前屈みの姿勢を繰り返す母は、背筋をぴんと伸ばせないまでに骨が変形していた。

収穫した葉は、一枚一枚縄に結い付けて天日で乾燥し、また一枚ずつ丁寧に手で伸ばす。それを秋に専売公社に納めて、現金を得る大事な仕事だった。良質な優等葉を作るためには、努力と労力を惜しまないことが求められた。

昭和39年の夏。2ヵ月後の10月には新幹線が開業し、東京オリンピックが10日から24日まで開かれようとしていた。その頃、私は夏井駅から郡山機関区の職場まで、1時間ほどかけて通勤していた。

母ちゃんは畑から戻ると、洗濯石鹸で手をゴシゴシ洗ってから、「今日はどこさ行くんだ」と、弁当にいれる卵焼きを作りながら聞いてきた。「磐西だ。会津若松へ客車で行って、帰りは明日の朝の貨物列車だ。家に戻るのには10時半の汽車になる」「暑いから気をつけんだぞ。事故をおこさねようにな」と心配顔で何度も言っていた。

空の弁当箱と一緒に持って帰るナツパ服（作業衣）は、幾つもの墜道を潜り吹き出す汗を吸い取って、黒煙の匂いも染みついて頑固な汚れとなっていた。それを洗濯板の上で、ゴリゴリと洗ってくれた。葉煙草のヤニにまみれた以上に、汚れにまみれた息子の作業衣を見て、仕事の過酷さを想像していたようである。

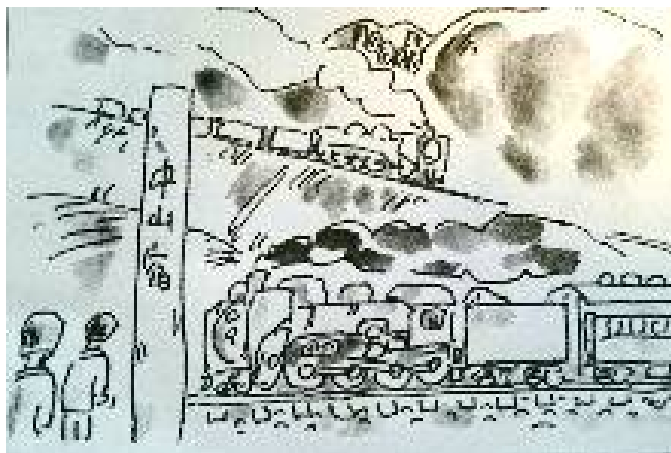
「昔、中ノ沢温泉に湯治に行った時、川桁駅まで切符を買って軽便（沼尻鉄道）に乗り換えただけんど、中山宿駅でバックした時にはびっくりした。汽車は前にだけ走るもんだと思っていたから」「それ、スイッチバックっていうんだ」「なんだ、それ？」

郡山駅を出ると喜久田、安子ヶ島、岩代（磐梯）熱海駅までの15・4kmはトロ登りだが、ここから中山宿、沼上信号場までの9・6kmは蛇行しながら険しい坂道が続く。登山鉄道のように急傾斜地にホームは作れないので、平坦な所にホームを設けて乗降してもらった。出発する時、蒸気機関車は逆走して郡山方面に戻る形になる。その時、ここまで走ってきた線路ではなく、通過線を横切って山の脇腹を削り取って敷設した、傾斜のついた引き込み線に入るのである。

この線路の長さは9両の客車分に、ブレーキ扱いを間違えても脱線しない余裕距離を持たせてあった。D51で引く貨物列車は、定数600トンの荷をポッポポッと、助っ人の96型補機に後押しされて通過し、急行や準急などは本線を突き抜けて行った。

このスイッチバックの信号は、機関士の側からは見えにくかったので、私がギョロッと目を開けて緊張の糸を切らさずに注視し続ける。25以下の速度でバックし、信号機を過ぎると火床の扉を開いて連続して10杯ほど投炭した。煙突からはきだされる黒煙が、真っ白い入道雲を隠すように吹き上がる。

そんな話を明治生まれの母ちゃんにすると「百姓も鉄道も仕事の厳しさは同じだとは言え、人さまの命や荷物を預かっているのだから、気の緩みのねいようにな」と言いながら、弁当と作業着を渡してくれたことが、お盆の墓参りでふと頭をかすめた。



## スカーフ

藤原 昌子

スカーフを入れた引き出しがいくつもある。いつの間にか増えていった。おしゃれアイテムでもあり実用アイテムでもあるが大抵の場合、コートや上着の首元へ気分により異なるものをあしらったりさし色として利用している。自分で買ったもの、プレゼントされたものいろいろで、購入した場所、くださった人など思い出し、しばし手がとまり揺蕩うことになる。

ロンドンのレディーたちのキャメルカラーやネイビーのベーシックな色のロングコートにスカーフを頭からまたは首元にきれいにあしらった着こなしに思わず見とれたものだ。はっきりした色合いのディオール。あのリバティーの古い建物で選んだりバティープリント。広げて額にでも入れた方が映えるグッチの麦と罌粟の花束の図柄。いずれ使うだろう、または、試してみたいと思ったけれど結局自分の色ではなかったようであまり使っていないものもある。

”冬の間はエルメスの厚手はいいけれど春になるとちょっと重いのよね”といていたおしゃれさんの言葉がこだまする。

春先に同席した方が見たこともない不思議なあしらいで華やかにスカーフをまとっている。結び方を聞いてもとてもまねができない。“ただこうやってこうしているだけなのよ。” うーん、それだけでは分からない。春はそこまで、もう丈の短いコートに変えて、でも気温は低いこの日、きれいな色合いのスカーフを胸元に飾って。いいな、気配り十分。

輸出されていたという横浜スカーフを是非見たいと思い探したこともあった。ほとんどのパターンが洋風でちょっとがっかりした。やはりオリジナルのものがいいように思う。オレンジからピンクへのグラデーションが東洋的かなと思いに決めたんだっけ。

きれいなエメラルドグリーンの小さな細長いスカーフ。これは着物から作ったもので両端に細かな模様のパージュが足してある。角に小さなビーズもあしらってあって、使い勝手はよい。DVから逃れてシェルターで暮らす人たちが作ったもの。安全で幸せな生活送られているといいのだけれど。

細いヤーンをかぎ針で編んだものも出てきた。宮城県で震災から逃れた人たちが仮設住宅で作っている。ヤーンが不足していることを知ったアメリカや

イギリス、フランスから大量に送られてきたのだとか。ニュースを発信した人がいて、材料を送った人がいて、作り方をアドバイスする人がいて、根気よく編む人がいて、それを東京まで運んだ人がいて、お茶会を開いた人がいて、出会ったもの。クオリティーも高くお気に入りの品。

過日、家の前を大きなゴールデンレトリバーが散歩していたが首には赤いバンダナ。年寄りなのかそういう歩き方の犬種なのか はたまた散歩が厭なのかのっそりのっそりと歩いていく。人なつつこそうで、目が合うとちょっと微笑んでいるように見える。かっこいいよ 元気よく歩くともっといいよと心の中で話しかける。犬のバンダナ。これはおしゃれか実用か。

今年の夏は殊のほか暑かった。必要がなければ外に出ず、もっぱら家の中でエアコンをつけて過ごした。TVでも老人は温度差に疎くなるので自分の感覚ではなく温度計を見て熱中症に用心するようにとか 適宜エアコンをつけましょう とか折に触れ注意を促してくれる。

昨今の困りごとは夫婦それぞれ体に最適な温度が違って来たことである。私に合わせると程なく夫のくしゃみが始まる。 ” もうちょっと温度上げていい?” と夫。 “カーディガンを羽織ってください “ と言っていたこともあるが一計を案じスカーフを巻いてもらうことにした。これが効果てきめん。ものの2,3分でくしゃみは治まる。” ね、体温は首元から逃げていくの。だから首元を閉じると一枚着たのと同じような効果があるのよ。“と受け売り。

” 科学的だね。“ (いえ、そういうわけではないのですが・・・)  
是はスカーフの実用的使い方になるうか。外出の時も持参する。喫茶店などでも席に着いたときは良くてもだんだん冷えてくる。そういうときも布きれ一枚で重宝なこと。



## 私の空襲体験

高橋 育郎

昭和16年。その年、尋常小学校は国民学校になった。そして私は入学した。国民学校は私が卒業した年、22年に終わった。だから、まさに私は生粋の国民学校生であり、戦時体制の中で教育を受けた戦争の落とし子といえる。

16年12月8日。真珠湾攻撃によって、大東亜戦争は勃発。子供心にその衝撃は大きかった。朝のラジオからは戦争開始のアナウンサーの音が甲高く響いて、いやがうえにも緊張感におののいた。登校時の町並みは、どの店も雨戸を閉めてシーンと不気味なほどに静まりかえっていた。校庭には日章旗が掲げられ空気が張りつめ、講堂には早くも東條首相の写真があった。パン、コーヒーはいち早く店頭から消え、食堂では洋食が消えた。「いまは非常時、節約時代、パーマネントはやめましょう」が歌われ「贅沢は敵だ」が叫ばれ、これが戦争というものかと思わず佇んでしまうほどだ。

入学準備で父が文房具店へ連れて行ってくれた。鉛筆は固く削りにくいもの。クレヨンも押し出しクレヨンに。文鎮はセルロイド製に。ランドセルは極端に品薄になって売っている店を探した。そして少年団が結成されて、登校時は隣組の生徒は一団になって、6年生の団長が引率した。

翌、17年4月、新学期の、たしか始業式の日だったか、学校は早く終わって、11時頃には帰宅。家には母の妹が赤ちゃんを連れて遊びに来ていた。午後から上野の動物園へ行く予定で、これから昼食を取ろうとしていた。このとき北区（当時は王子区）の赤羽町に住んでいた。私は隣の家の今年入学する子と堀越しに話をしていた。そのとき、聴き慣れない爆音が低空で接近してきた。驚いて見上げると操縦士が私をみた。私と目と目が合ってしまったのだ。その顔はアメリカ兵だった。

驚いた私は、そのことを居間にいた母へ知らせに行った。母は「そんなこないよ。アメリカの飛行機が飛んでくるなんて」小母さんも同意した。当時はまだ日本は南進に南進を続け占領地を拡大し、勝ち戦に湧いていた。映画館（活動写真館と言っていた）では、ニュース（報道）を必ずやって、その模様を映し、場内は万歳、万歳の声がどよめいた。そんな勝ち戦のさなかの出来事だ。だから信じられないのがもっともだった。

赤羽の工兵隊では、高射砲を数発撃ったが、敵の爆撃機ボーイングB17は屋根すれすれの低空だったため、狙いは定まらず、上空の方で白煙をたなびかせていた。敵機が見えなくなった瞬間、爆弾の落ちた音が聞こえた。間も



なく正午のラジオニュースが「東京上空に敵機侵入」と報じた。母も顔色が変わるほど驚いた。あの爆発音は隣町、志茂に焼夷弾が落とされた音だと知った。B17 は九十九里浜を抜けて引き上げていった。これは、日本初の空襲だったのだ。私と顔を合わせた米兵飛行士は母国に帰って英雄として迎えられたことも知った。私はかくして日本初空襲にその飛行士と顔を合わせるといふ奇跡を体験したのだった。

翌18年6月。父が鉄道連隊へ軍属として召集された。もう東京は危ないことが、はっきり分かっていたので、残された家族、母と私と弟は母の実家である埼玉県の新井町へ疎開した。まだ、疎開という言葉が聞かなかったころで、秋ごろからいわゆる縁故疎開が増えてきて、教室は児童で埋められていった。食糧難はますます厳しくなり、商店は店じまい。自給自足の生活になって、耕せるところは全て耕し野菜を育てた。幸い川には魚や貝が増えて、子供たちまで嬉々として漁場にした。秋の稲田はイナゴとりだ。弁当箱の蓋をあけると、生徒全員のおかずがイナゴといったことがあり、教室が大笑いになったこともあった。

昭和20年3月、東京大空襲。この夜11時頃か。母に揺り起こされた。眠い目をこすり窓をみると、曇りガラスの窓が真っ赤に染まっている。あまりの異常さに緊張が走った。これほどの空襲は経験がない。それでも日頃から、いざという時のために防空頭巾はじめ衣服はきちんと枕元に置いてあるので、着替えは早かった。庭に飛び出すと東京上空は真っ赤に燃えさかっていた。表通り（日光街道）に人声が聴こえるので出てみると、近くに流れる古川の橋をめざして急ぎ足で歩いて行く。私も後を付いた。

橋の上からは、燃えさかる東京の夜空がよく見える。ボーイング B29 の編隊が焼夷弾を落としながら悠々と飛んでいく。これに向かって追撃を試みた日本機は只の一機。スルスルと近づいて行ったそのとき、一斉射撃を浴びて、機体を振りみだすように落ちて行った。橋上で見守る数十人の声は、大きなため息に替わった。

この光景を最後に空襲は終わって、みな三々五々に散っていった。帰り道、空からひらひらとピラが舞い落ちてきた。拾い上げてみると「もうこの戦争は終わりが近い。われわれが日本に上陸するころは、サツマイモがおいしい時期だね。ご馳走になれるのが楽しみだ」と日本語で書いてあった。このすさまじい戦争のさ中に、こんな無邪気なことを書くのか。まるでお伽噺の世界だ。

私は1年生のときから夏休みは大半を父の実家、北吉見村（いまは町）で過ごすのが習わしになっていた。この夏も伯父の強い誘いで、母と三人、出

かけた。高崎線熊谷駅の手前、吹上駅で降りて徒歩小一時間の荒川を渡っての道のりだ。昭和20年8月半ばのこと。夏の日差しが暑い。遠くに秩父連山が望め、近くは見渡す限りの田んぼで、ポツンポツンと屋敷林がみえる。

若者は兵役に就いて、自然は手つかずに溢れかえり、生きものは生き活きと動きまわっていた。空は青く澄み切って高く、その青さが印象的だ。この少し前、8月6日広島に、ついで9日に長崎に原爆投下。この惨状には身の毛のよだつ思いにとらわれた。当時は出かけるにしても、切符は統制販売で、身分証明書を持たねば切符は買えない不自由な時代だった。

8月14日。この日も天気は上々で、朝から太陽は燦々と降り注ぎ、子供たち5～6人は、真っ黒に日焼けして、田んぼの用水で嬉々として戯れていた。土手の草はらには、ウシやヤギの鳴く声が聞こえていた。

その夜、床の中でゴォゴォと音がしているのが聴こえていたのだが、家の廊下でビー玉ころがしをして遊んでいる夢になっていた。すると伯父さんが庭で駆けまわるようにして「空襲だ。空襲だ」と叫んでいる。「早く防空壕へ」という声もきこえた。その声にさっととび起き、身仕度をする、従弟たち6人と一目散に防空壕へ飛びこんだ。中は雨水が半分くらい溜まっていて、胸あたりまで水に浸かってしまった。蚊は驚いて一斉に飛び立ち、誰彼かまわず襲撃だ。いたたまれず外へ出ると、熊谷上空は、火の海になっている。B29 がバラバラと焼夷弾を降らせるように落とす。その音はガラガラと耳をつんざいて凄まじい。熊谷航空隊が撃ち放す高射砲は空しく煙を飛散させていた。狙われているのは、熊谷と知ると、みんな防空壕から出てきて、隣の家も一緒になって、怖いもの見たさの見物となった。

すると、ものの10分ほど経ったころ、こちらを目がけて戦闘機がまっすぐに急接近してきた。「ウワー」みな悲鳴を上げて一斉に飛び散った。私は隣の家の勝手口に飛び込み傍らの風呂桶に身を伏せた。恐怖の一瞬。やがて静けさがもどると、みな恐る恐る出てきて顔を見合わせた。そして安堵し、寝に戻った。ところが、直後に爆音が聞こえたと思ったら爆弾の落ちる音が聞こえ、これが空襲のおまけですよといわんばかりに静けさは戻った。翌日知ったことは、爆弾投下を近くに受けた家では、花嫁を送り出す準備で、つい筆筒の着物をみたくて電燈を点けたのだ。その明かりが雨戸の隙間から洩れて、落とされたという。それはなんと時限爆弾とのこと。更に後で知ったのだが不発弾だった。わがもの顔に飛びまわっている米軍の、余裕のいたずらだった。

夜は明けた。太陽はなんの陰りもなく晴れ晴れとした表情でみんなを迎えている。子どもたちは、昨夜の恐怖はどこへやら、川遊びに夢中だった。蛙は水に跳び込み、小魚はスイスイ。蛭に足を咬まれることもある。

午後3時ごろ、役場勤めの伯父さんが帰ってきた。いつもと違う早帰りだ。帰りしなに隣に声をかけた。子どもたちは、怪訝そうに様子をうかがっていた。伯父さんは、隣のおじさんと上がりかまちに腰をかけて、話し合っていた。「どうも、なんだか変だ」子どもたちは、そう思って、叔父さんに近づくと、伯父さんは立ち上がって「日本は戦争に負けた」といった。「きょうのお昼に天皇陛下のお言葉があった」といった。譬えようもない悲しさと無情さ胸を圧迫した。このあたりは昨夜の空襲で停電したのでラジオ放送が聞けなかったのだ。その夜、私は胸がつかえて食事が喉を通らない。タイへ行っている父はどうなるのか。米鬼と呼ばれた米兵が上陸したらどうなるのか。不安がつのってくる。

とにかく明日は帰ろうということになった。早めの昼食をとって、帰ることにした。だが14日の夜落とされた時限爆弾が、なんと土手の道に横たわったままている。片づけるにも人手がないのだ。でも、その道を通らねばほかに道はない。いつ爆発するか知れない爆弾のそばを通るのだ。戦争が終わったというのに、またも恐怖におののいた。すぐ傍らを通る時、緊張は最高度に達した。音を立てず通り過ぎて50メートルほど行ったところで、3人は立ち止って後ろを振り返った。爆弾は相変わらず平然と横たわったままだった。帰途、吹上で列車に乗って帰宅するまで、ここでもエピソードがあったが、空襲体験からは外れるので省略しよう。とにかく我が家に辿りついた時の安堵感といったらない。もう戦争のない世の中になったのだ。灯火管制から解放された電燈の下での夕食のおいしかったこと。

それにしても私は本土初空襲に米兵と顔を見合わせ、最後の空襲で襲撃と時限爆弾の恐怖にさらされた、ちょっと変わった奇跡のような体験をしたのであった。(おわり)

## 終戦70年に想う歌

高橋 育郎

終戦70年のこの年、思い起す私の歌 3曲です。

「ひめゆりの塔」 齊藤信夫 作詞 高橋育郎 作曲

沖縄の  
摩文仁の丘の ひめゆりの塔  
うら若き  
乙女子達の 殉国の塔  
島育ちの  
ガイドが語る ふるえ声に  
旅びとは  
涙こらえて しばし聞き入る

香煙の  
絶えることなし ひめゆりの塔  
咲きそめて  
急ぎ散華の 純愛の塔  
相いだき  
無念の叫び 偲ぶさえも  
旅びとは

昭和20年 大東亜戦争末期、沖縄は米軍の地上攻撃にあつて、戦火にさらされ多くの犠牲者を生みました。なかでも女学生の決死部隊「ひめゆり隊」の悲劇は凄まじく、戦後、香川京子主演で映画化されて多くの涙を誘いました。この映画の記憶は忘れられません。

さて、この歌にめぐりあつたのは、昭和63年、私は「生涯現役実践塾・LVC」に入ってイベント企画の仕事を始めました。

ちょうど母の実家のある埼玉県の新井町が町制100年を迎え、記念事業の一環として100年祭りがおこなわれる中に「親子のど自慢大会」が企画され、私は町の依頼で川田正子さんを招きました。このとき私は「あゆみの箱」に入り、こちらの斡旋で実現しました。

一方、このころ千葉県作詞作曲家協会の会員になって、このご縁から銚子市教育委員会の主催「銚子少年少女合唱団と川田正子・森の木児童合唱団」のコンサートを企画演出することになりました。舞台演出はこれが初めての経験でした。結果は大成功に終わり、このとき記念にと「齊藤信夫童謡詩集」

を頂きました。ここに「ひめゆりの塔」が載っていて、私は、あの映画の感激を思い起こして、作曲しました。そして、斉藤信夫先生宅に電話しました。電話に出た奥さんから聴かされたことは、まさに衝撃でした。つい先日、夫は亡くなりましたという返事に声を失いました。斉藤先生は戦時中、川田正子さんの家庭教師もされ、当時、先生の詩「里の秋」を歌って国民的愛唱歌になりました。

一方、この歌が出来たころ、LVC では、香川京子さんのご主人を講師に招いて講演がありました。香川さんは、「東京ひめゆり同窓会」の名誉会員でした。そこでLVC 東瀧代表が取り次いでくれ、沖縄に連絡されました。

しかし、せっかくの計らいであったのですが、この歌は軍歌の匂いがすると言って、拒絶反応にあい、没になってしまいました。フィナーレに葬送行進曲風のメロディーを奏でたことが災いしました。それでも私にとって大切な歌であることにかわりありません。

斉藤先生の奥様からは丁寧なお礼の手紙を頂きました。

「ああ浦頭」                      山田十字 作詩                      高橋育郎 作曲

引揚船の 哀感染めて  
夕映えかなし ああ浦頭  
人波絶えて 星霜うつり  
平和の庭に 女神(かみ)舞いたまう

祖国の一步 よろける我を  
背負ってくるり 踊った戦友(とも)よ  
君ははやなく ああ我ひとり  
生還の地に 古傷うづく  
異国に迷う 稚児を還せと  
叫んで伏した 母親いずこ  
嘆きの岸に 人影もなく  
海鳥一羽 漂うばかり

時代(とき)のうず潮 黙して耐える  
針尾の丘の 三本塔を  
道に迷えば また振り仰ぎ  
残る旅路の 行方定めん

この歌の巡り合わせは、やはりLVCでした。平成になって同会では、季刊「ライフ・ベンチャー」を発行しました。柳原正年さんの発案によるもので、私は編集委員になりました。

そこで 生涯現役で活躍している人物紹介欄を設け、私は横浜市の「かなざわ会」代表、門口泰宣さん取材しました。その折、この歌を見せられ、作曲者を探しているところだが、作曲してみてはいかがと言われ、私は喜んで引き受けました。ところで「浦頭」とは何ですかと質問しました。浦頭は佐世保港のことで、戦後大陸からの引揚船が着いた港のことで説明されました。私はすぐに作曲して門口さんを通して、作詞者に送ってもらいました。

作詞者は長崎県立長崎大学英文科教授でした。いただいた返事に私はただただ驚きました。この曲を聞いて思わず居ずまいを正したというのです。そのあとの手紙では 地元佐世保市のママさんコーラス3団体が、クリスマスコンサートで発表するというものでした。その結果、コンサートは成功したという話が届き、このことから話は発展して、来年は引揚50周年になるので、これを記念して「佐世保市引揚記念平和公園」にて市民音楽祭として歌うことになったと言ってきました。

ここに招待を受けましたが、あいにくこの年は雨が少なく水飢饉になって、楽しみにしていた招待は実現しませんでした。しかし会は、すごく盛大で地元の声楽家が男女それぞれママさんコーラスをバックに歌い、民舞やフォークダンスにアレンジされ踊り、そのビデオが送られてきました。タウン誌には5回ほど特集記事になって、またラジオ長崎で放送され、「ひろめる会」ができて広まり、更に2年ほどして グラバー邸で長崎ご当地ソング・ベスト50が発表され この歌は40何位かになりました。

それから2年ほどして、こんどはハウステンボスに会場が移り、JR九州とJTB が共同主催で「ああ浦頭を歌う全国の集い」が開かれました。延べ5日間にわたって、5万人が訪れたと、知らせをうけました。佐世保湾に引揚船を模した船を一巡させ、棧橋から上陸する参加者を、海上自衛隊の吹奏楽が、なんと川田さんの「里の秋」を演奏して迎えました。その模様もビデオになって送られてきました。ホールでは、おごそかな中に「ああ浦頭」が歌われました。NHKの「おーい長崎県」で放送されました。残念なことは、作詞者が郷里沖縄に帰られ、この催しがある、少し前に亡くなられたことです。

「長崎の鐘が鳴る」

高橋育郎作詞曲

- 1 宇宙をめぐる 人は見る  
ひときわ光る あの星は  
あれは地球 美しい  
伝えてゆこう この喜びを  
平和のくらし みんなで守ろう  
長崎の おもいをこめて鐘は鳴る
  
- 2 あの日のことは 忘れない  
ひらめきおそう まぶしさは  
あれは原爆 きのご雲  
惨禍極みて 涙もかれる  
永遠（とわ）の平和を みんなで守ろう  
長崎の おもいをこめて鐘は鳴る
  
- 3 憎しみ遠く 消え去りて  
ひたすら願う めぐる春  
花は咲き染め 鳥は飛ぶ  
尊きみたま 導きたまえ  
平和への道 みんなで歩もう  
長崎の おもいをこめて鐘は鳴る

長崎原爆50周年に、市では50年史を編纂するに当たって、歌詞を公募しました。私は「長崎の鐘が鳴る」を作詞して応募したところ佳作入選して、「50年史」に掲載されました。

## つくくらぶ ―活動の経緯と理念―

我が国は、自国語の日本語によってほぼ全ての日常生活が完結され得る国です。それだけに来日した欧米ビジネスマンの多くにとって、国際都市東京に於いて英語がほとんど役に立たないことは大きな驚きであり、また自らは、“読めない、聞けない、書けない、話せない”の四重苦に陥る現実に愕然とします。日常生活やビジネスのやりとりの中で非常に異なった価値観、いわゆる 異文化の世界の中で途方にくれ、不本意な思いで帰国する事例が多くみられます。その背景には、歴史伝統からの文化慣習の差による 異文化の壁があります。

平成 11 年来、英語でコミュニケーションのできる家庭婦人達が集まり、業務で来日生活する外国人及び家族が遭遇する文化慣習の違いから生ずる諸問題の解決を目的として、「つくくらぶ」の名で支援活動を行ってきました。

“つくくらぶ”の名は、“(人に)尽くす”との意味を込め、同時に、雪解けの春の野に顔を出し“自ら伸びやかに育つ”土筆の姿を思い描いています。

異文化は、なにも国と国との間にだけあるものではありません。同じ国の中にも、個人どうしの中にもあります。文化はどちらが正しく、どちらが悪いというものではありません。それぞれの正しさを主張しあうところに紛争や憎しみが生じがちです。それゆえ、私どもは、お互いが相手との違いを理解し、その違いを尊重し合うことこそが、相互理解を可能にするとの考えで、これまで活動し、これからも活動してまいります。

これらの活動を明確に位置づけるため、内閣府に特定非営利活動法人としての設立申請を行い、平成 18 年 9 月 5 日、その認証(府国生第 859 号)を取得しました。

また、これを機会に、国内外のビジネスや技術開発など、長年業務に携わった経験豊富な方々の知恵や工夫をも活動に生かして行くこととしています。





## つくしくらぶ ―活動の経緯と理念―

我が国は、自国語の日本語によってほぼ全ての日常生活が完結され得る国です。それだけに来日した欧米ビジネスマンの多くにとって、国際都市東京に於いて英語がほとんど役に立たないことは大きな驚きであり、また自らは、“読めない、聞けない、書けない、話せない”の四重苦に陥る現実に愕然とします。日常生活やビジネスのやりとりの中で非常に異なった価値観、いわゆる 異文化の世界の中で途方にくれ、不本意な思いで帰国する事例が多くみられます。その背景には、歴史伝統からの文化慣習の差による 異文化の壁があります。

平成 11 年来、英語でコミュニケーションのできる家庭婦人達が集まり、業務で来日生活する外国人及び家族が遭遇する文化慣習の違いから生ずる諸問題の解決を目的として、「つくしくらぶ」の名で支援活動を行ってきました。

“つくしくらぶ”の名は、“(人に)尽くす”との意味を込め、同時に、雪解けの春の野に顔を出し“自ら伸びやかに育つ”土筆の姿を思い描いています。

異文化は、なにも国と国との間にだけあるものではありません。同じ国の中にも、個人どうしの中にもあります。文化はどちらが正しく、どちらが悪いというものではありません。それぞれの正しさを主張しあうところに紛争や憎しみが生じがちです。それゆえ、私どもは、お互いが相手との違いを理解し、その違いを尊重し合うことこそが、相互理解を可能にするとの考えで、これまで活動し、これからも活動してまいります。

これらの活動を明確に位置づけるため、内閣府に特定非営利活動法人としての設立申請を行い、平成 18 年 9 月 5 日、その認証(府国生第 859 号)を取得しました。

また、これを機会に、国内外のビジネスや技術開発など、長年業務に携わった経験豊富な方々の知恵や工夫をも活動に生かして行くこととしています。



平成 27 年 9 月 (第 9 卷 3 号) 貝坂倶楽部

発行所 NPO つくしくらぶ出版

102-0093 東京都千代田区隼町

2-12 藤和半蔵門コープ 801

email [tpine304@nifty.com](mailto:tpine304@nifty.com)